

## すべてのことに意味がある

小山 優太

私は四月一日から長野市の広徳中学校で一年四組担任、女子ソフトテニス部顧問として全校約六〇〇名の生徒の前で教諭をしています。新型コロナウイルスによって大学卒業をした実感もないままに気づけば社会人一年目を迎え、三日後には三五名の生徒に直面し、あつという間に学級開きをしていました。頭の整理も机上の整理も追いつかないような中、必死に働きました。しかし、対面から一週間後には臨時休校となり、次に生徒全員が教室にそろったのは六月という異例のスタートとなりました。それから二ヶ月間の一学期を送り、定期テストに通知表、保護者懇談会と大きな山場を経験し、ようやくほっと一息夏休みを迎えることができました。周りの先生方からもよくこの不規則な日課の中でやりきったねと声をかけていただきましたが、個人的には臨時休業があったから乗り越えることができたのではないかという気もしてい

ます。生徒に一週間でも対面することができた上での準備期間とすることができ、授業の準備や学級経営についてゆっくり考えることができました。コロナウイルス感染拡大をプラスに捉えることは決してできないですが、今回のような大きな出来事にはやはり何か意味があるのだと感じました。「身の回りにおこるすべてのことには意味がある」という考えを大切にしていますが、今回もその考え方で乗り切ることができたかと思いません。

学級経営や、慣れない部活での指導に追われ、一年前に短信に書いていたような自分の武器を活かす仕事は満足にできていないですが、一年目から担任と主顧問を経験できることにはやはり大きな意味があると思います。幸いにも職場環境には恵まれているので、先輩の先生方から日々学びつつ、大学時代の大切な同期と連絡を取り合い、切磋琢磨しながらさらに自分の武器を磨いていきたいと思えます。

(こやま ゆうた 長野市立広徳中学校)